

聖書：マタイ 16：20～28

説教題：まことのいのちを見出す

日時：2019年10月13日（朝拝）

今回はペテロの信仰告白の言葉を見ました。「あなたは生ける神の子キリストです。」弟子たちはついにこの告白ができるまで導かれました。これをあなたがたに示したのは天にいるわたしの父であるとイエス様は言われました。これはイエス様がこれまで弟子たちと共に過ごして来られたことを通して、ついに彼らに結ばれた「実」であると言えます。

さて今回は 20 節を残しましたが、そこでイエス様はご自身がキリスト（メシア）であることを誰にも言うてはならないと命じられます。これはどういうことでしょうか。イエス様は神が約束されたメシアであるという喜ばしい知らせは多くの人に伝えた方がよいのではないのでしょうか。なぜそうなのかは続く箇所を読むと分かります。それはイエスはキリストであるというメッセージは、正しく理解するのがそう簡単ではないということです。弟子たちでさえ、21 節以降では、その意味を全く理解していなかったことが明らかにされています。そんな状態で人々に伝えたところで益々人々は誤って捉えるだけです。それは正しいメシア理解の妨げになります。当時の人々がメシアに抱いていた期待はローマ帝国の支配下にあるイスラエルをそこから解放し、世界の上に高く上げてくれる救い主という考えでした。一般に政治的メシアとか武力的メシアと呼ばれます。その強い力をもって、いわば武力をもって、敵を打ち負かし、イスラエルを栄光の状態へ導いてくださる方。しかしイエス様はそういう方ではありません。イエス様はペテロの「あなたはキリストです」という告白を受けて、ではそのキリストとはどういう意味か、キリストはどのようにして民を救い出す救い主なのか、その本質について語って行かれるのです。

イエス様は 21 節で、ご自分がエルサレムに行って長老たち、祭司長たち、律法学者たちから多くの苦しみを受けること、さらに殺されること、そして 3 日目によみがえらなければならないことを弟子たちに示し始められます。弟子たちにとっては耳を疑うような言葉でした。ここで「～しなければならない」という言葉で語られていますが、なぜそのようでなければならないのでしょうか。それはこれが神の御心であることを示しています。人々の救いのために神が定めた計画が実現するためにこれはどうしても必要

なこと、必ずなされなければならないこと、イエス様がメシアとしての働きをするためには絶対必要なことということです。単にイエス様に神としての腕力があれば民を救い出せるのではないのです。その救いのためには罪から贖い出すための代価が必要とされます。そしてそれが十分に支払われた結果として復活が続かなければならないとも言われています。このようなイエス様の受難については、これまでも9章15節や10章38節などですでに暗示されて来ましたが、イエス様は今日の箇所から本格的にこのことを語って行かれるのです。

その言葉を聞いてペテロがイエス様を脇にお連れしていさめ始めます。「主よ、とんでもないことです。そんなことがあなたに起こるはずがありません。」 ペテロにとっては全く理解できないイエス様の発言でした。なぜメシアがユダヤ教指導者たちによって殺されるのか。なぜ人を救うはずのお方が逆に殺されてしまうのか。彼にとっては矛盾する話でしかありません。そこでイエス様を脇に連れて行って、イエス様をいわば叱責したわけです。イエス様、あなたは何を言っているのですか。そんなことがあなたに起こるはずがありません！そんなことはどうぞ言わないでくださいと。そんなペテロにイエス様から厳しい言葉が発されます。「下がれ、サタン。あなたは、わたしをつまづかせるものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」 たった今、立派な告白をしたペテロが、その直後にサタン呼ばわりされています。思い起こされるのは、この福音書4章冒頭で見た荒野におけるサタンの誘惑の記事です。サタンは40日40夜、断食して祈っておられたイエス様のところにやって来て、あなたが神の子ならこの石をパンに変えて神の子であることを証明して見せよ！とけしかけました。そしてこの世のすべての国々とその栄華を見せた後、もしひれ伏して私を拝むなら、これを全部あなたに差し上げましょうと語りかけました。これは苦難をパスして栄光へ直行するように！という誘惑です。ここでのペテロの提案と同じです。あなたは十字架なんかに進む必要はありません。その道に進まないようにしてください。イエス様はそれと同じささやきをここに聞き取ったから、すかさず「下がれ！サタン！」と言ったのです。人間的には優しい言葉であっても、その背後に神の道から足を踏み外させようとさせるサタンの存在を見たからこそ、イエス様は「下がれ！サタン！」と言われたのです。

イエス様がこれほどに厳しく語られたのは、反対から考えれば、それだけイエス様が日々悪魔との激しい戦いの中にあっただからでしょう。イエス様にとって、これは決して

小さな誘惑ではなかったのです。イエス様にとっても苦しみの道なんかには行きたくはなかった。死と関係のない方がやがて死に服さなければならないということは、考えるだけで身の毛もよだつような出来事でした。ですからイエス様は十字架前夜、ゲッセマネの園で「父よ、できますならこの杯をわたしから取り除けてください」と祈られます。そのようにご自身にとって大きな誘惑となるささやきだったからこそ、イエス様はここで厳しくはねのけられたのです。私たちの救いを勝ち取るためにイエス様の中には日々どんなに大きな戦いと献身があったかということ、私たちはこのイエス様の激しい一言の内にも見させられたいと思うのです。

さてイエス様がこういう方であることは、その方に付く弟子のあり方も規定するものになります。師であるイエス様が人々から苦しめられ、十字架の死への道を歩むなら、その弟子である者たちも同じような運命をたどることを予期しなければなりません。イエス様は 24 節でこう言われました。「それからイエスは弟子たちに言われた。『だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。』」これは私たちがあまり聞きたくない言葉かもしれませんが。私たちはイエス様の十字架を感謝します。そのようにして勝ち取られた救いを感謝して受け取りたいと思います。しかし実際にイエス様に従ってこのような道に行くことは、できればパスさせていただきたい。これは特別な弟子のための言葉であって、一般の信者である私にはあまり当てはまらないものとして読みたい。ここにまず「自分を捨て」とあります。これは私たちが一番したくないことです。私たちは自分を捨てたくない。むしろ反対に自分を主張したい。自分のやりたいことを主張し、我を通したい。また「自分の十字架を負い」とあります。十字架は当時の極刑です。この刑を科される人は刑場まで自分の十字架を背負って歩いて行かなければなりません。その道を再び戻って来ることはありません。一方通行の行進です。人々から散々馬鹿にされ、見下された挙句、最後に待っているのは死です。ですから十字架を負うというのは徹底的に自分に死ぬ行進をすることです。私たちはこんな歩みは自分にはとてもできないし、したくないと思います。

しかしそうする人は、25 節の「自分のいのちを救おうと思う人」に当たります。そしてその人はそれを失うと言われています。この人はこの世における自分のいのちを守ろうとする歩みを、イエス様に従うことよりも優先順位の高い方に置く人です。言い換えればこの人は神の国とその義とをまず第一に求める歩みをしない人です。イエス様はま

さに神の国と神の義をまず第一に求めて歩いておられます。神の国確立のためにご自身をささげておられます。しかしその人はこの道に行くことを嫌う。むしろこの世で自分のいのちを保つことが第一。自分が喜び、自分が楽しみ、自分が満足し、自分が心地よく生きることが第一。それと対立するイエス様に従う歩みは後回しにする人です。しかしそのように自分のいのちを救おうとする人は、それを失うとされています。なぜならその人はイエス様との間に真の交わりがないからです。体は生きていても真のいのちは持てないからです。

これと違うもう一つのあり方は、「わたしのためにいのちを失う」という生き方です。この人はイエス様に従うことを第一にする人です。言い換えれば神の国とその義とをまず第一に求める人です。十字架へと進むイエス様の後に付き従う歩みは周りの人みなに賛同されるとは限りません。むしろ人々から見下される結果につながりかねません。あの十字架にかかって死んだ人のどこがいいの？あのような悲惨な死に方をした人を神と信じ、従うなんて変わり者だね。私はそんな道は行きたくない。そのように人々から見られ、社会的評判を落とすことにつながるかもしれません。またイエス様にならって神の国とその義とを第一に求める歩みは、何と言っても自分中心の生活とぶつかります。自分ファーストではなく、神ファーストと言うのですから。そのため、自分がしたいと思っていたことを脇に置かなければならないかもしれない。それ自体、道徳的に何の問題のないことであっても、神の国とその義とを優先するがゆえに、それらを後回しにし、後ろに捨て置くということにもなって来ます。それは私に与えられている時間をどう使うかということにも関わって来ますし、お金をどう使うかということにも関わって来ますし、また自分が持っているエネルギーの使い方にも関わって来ます。自分のことだけ考えていれば、自分を楽ませることだけ考えていれば良いですが、神の国とその義を優先して求めるなら、そのために立って行って労苦することに自らをささげなければならないかもしれない。まさにこれは自分を捨てること、自分に死ぬこと、またこの世における自分のいのちを失うことです。しかしその人はただ悲しみながら、歯を食いしばって我慢しながら、そうするものではありません。わたしのためにいのちを失う者は、そこにまことのいのちを見出すとされています。そこにイエス様との真の交わりを経験し、真のいのちを体験し、ここに本当の幸いがあるということを知り、深く満足する者とさせられるのです。

26 節に「人は、たとえ全世界を手に入れても、自分のいのちを失ったら何の益がある

でしょうか。そのいのちを買い戻すのに、人は何を差し出せばよいのでしょうか。」とあります。この世における自分の満足と祝福のために生きて、仮に全世界を持つに至ったとしても、この世界はやがて過ぎ去ります。その価値は残りません。その時、もしその人が真のいのちを持っていなかったら一体何の良いことがあるのでしょうか。あのルカの福音書12章の金持ち農夫の話が思い起こされます。地上の生活が終わりになる時に、自分は大切なものを何も持っていなかったことに突然目が開かれ、神から「愚か者！」「究極の愚か者！」と言われる。そのいのちを買い戻すために、人は何を差し出せば良いのか。その時が来たらもうどうすることもできません。

27節と28節は主に従って歩む者への励ましです。まず27節で言われているのは主の再臨の日のことです。イエス様は父なる神の栄光を帯びて来られ、その日に一人一人の歩みはその光の下で裁かれます。その日まで神の前に何ら価値ある歩みをしなかった人は、そのことをその日に問われ、その報いを受けます。一方、神の国とその義のために歩んだ人は高く上げられます。十字架への道を進んだイエス様が、その日にはこの上なく高い栄光の状態にあるように、そのイエス様に従う人も高くされ、豊かに報われるのです。

最後の28節は解釈が難しい言葉とされています。「人の子が御国とともに来るのを見るまで、決して死を味わわない人たちがいます」と言われていますが、これはいつの出来事を指すのでしょうか。前の節と同様、主の再臨の日のことでしょうか。しかし使徒たちが生きている間に主の再臨は起こらなかったもので、そのことではないと思われまます。またイエス様は再臨がいつ来るかについて期間を定めることはしませんでした。その日その時がいつであるかは、人の子も知りませんと言われました。そのイエス様が突然ここで、弟子たちが生きている間にその日が来るというような限定をされるはずがありません。ではここはどういう意味でしょうか。「人の子が御国とともに来る」と言われていますが、「御国」とは「神の支配」のことです。ですから一般的にこれはイエス様の復活以降、神の支配が力をもって地に臨むようになることを指すと取る人が多いようです。イエス様の復活、昇天、聖霊降臨、全世界への福音宣教、……。それらの内には十字架にかかられたキリストが、それで終わりになることなく、むしろ高く上げられたお方として、この世界に神の国の力を持って臨み始めることが示されます。弟子たちは地上に生きている間にそのことを経験し始めるのです。それは彼らにとっての励ましです。彼らはそのことを通して、やがて完全に現わされるキリストの栄光の日を前に

見つめつつ、自分たちも十字架を通過して栄光へ入られたイエス様に従うようにと召されているのです。

この御言葉は今日の私たちにとっても同じ意味を持っていると思います。イエス様はご自身がキリストであるとはどういう意味であるかを今日の箇所から明らかに示し始められました。イエス様がこの道を進まれるということは、その方に従う私たちの生き方も定めるものになります。私たちもペテロと同じように、十字架の道なんかはやめてもっと輝かしい道を行きましょう！もっと楽で、自分のいのちを救う道を行きましょう！と言いやすい者です。私たちの前にも二つの道があります。一つはイエス様の後に従い、神の国とその義に関することを他のどんなことよりも優先して考え、そのために自分をささげる生活。そういう意味で自分に死ぬ生活。もう一つはこの世における自分のいのちを守り、やがては消えゆくそれらのことのために一生懸命に全てを費やし、やがての日に空しい生き方をして来たことが判明する歩み。私たちは自分がどうするかということの前にまず、私たちの救いのためにご自身のいのちさえもささげて十字架への道を進まれたイエス様の姿を、しっかり見つめる者でありたいと思います。そしてそのイエス様に感謝して、イエス様が切り開いてくださる神の国とその義とを第一に求める生活を私たちも考え、選び取って行きたい。そうする人はいのちを失うようでありながら、実はまことのいのちを見出します。その歩みを重ねて、やがての日には喜びをもって主の御国に迎え入れられ、豊かに報われることを楽しみにしながら、かの日に向けて励む御国の民の幸いに生きて行きたいと思います。